L・W・パイ著

『中国政治の精神的風土——政治発展における《権威の危機》の心理・文化的研究』

Lucian W. Pye, *The Spirit of Chinese Politics: A Psychocultural Study of the Authority Crisis in Political Development* Cambridge, Mass., The M. I. T. Press, 1968, xxii+255 p.

I

MITのL・W・パイ教授の中国政治に関する新著（本書）は，最近のアメリカの中国研究における一つの傾向を端的に代表するものとして注目に値する。この新著の著しい特徴は，“心理・文化的分析”という論争的なアプローチを大胆に導入し，初めて中国の政治文化の一側面に体系的分析を試みたということである。本書は高度の中国研究の専門書であると同時に，比較政治学上の業績として議論の対象にもなるであろう。パイは既に1964年にはMITの国際問題研究所のモノグラフとして“The Communes: A Microcosm of Chinese Communion”と“The Dynamics of Hostility and Hate in Chinse Political Culture”の2著を出版しているが，政治発展の問題をめぐる比較政治学の専門家として，いよいよ本格的に中国研究の領域にも足をふみ入れてきたということであろう。

II

本書の構成は次のようである。序論，第1章近代化における権威の危機，第2章ハイアラーキーとイデオロギーの慰め，第3章近代人なしの政治，第4章偉大さという重荷，第5章憎悪の発見，第6章権威，修養，秩序，第7章挫けた父親と新しい権威への苦しい探求，第8章意志の力と道徳：行動の力学，第9章組織的行動と軍人精神，第10章行動の政治過程：人民公社，第11章未来の展望——である。

パイの本書における議論はきわめて思弁的であり，仮説的な構想力を多岐にわたって驚異的なまでに展開している。それだけに，本書の内容を評価する場合，まずかれの立論の前提について，明確な限定的認識をもつことが必要である。序論においてパイがこの研究の目的と方法について繰り返し強調していることは，この研究がデータや証拠を整理することによる，ある事例の証明のためのものではないということである。かれの目ざすことは，中国の政治発展のある側面を説明するための仮説の設定である。その仮説を，パイは清朝期から毛沢東時代の今日に至るまでの中国の政治文化の分析を通じて構築しようとする。しかし，パイの関心の焦点は，政治文化論一般ではなく，当然のことながら，近代化の問題との脈絡の中での中国人の精神構造に向けられる。具体的にそれを表現すれば，中国人のいかなる独特の民族的，パーソナリティー的特性——態度・感情が，「近代化における中国人の成功と失敗とを決定するうえで最も重要であった」のかという問いである。いいかえれば，中国の近代化がなぜ困難なのかを，人間的次元から追求し，中国の政治発展にある種の展望を加えようとするのである。

しかし，ここでふたたび限定しておかなければならないのは，このような脈絡での中国人のパーソナリティー論は，あくまでも仮説的なものであるということである。つまり，パイの関心は中国人一般の中にみられる態度と感情の実際の分布状況に係わっているのではなく，中国の政治体系が今日のような形態で発展してくる過程で存在してきた，中国人の態度，感情の星座を記述することである。したがって，パイは明確にサンプル・サーベイ的方法とは無関係であると，自分の立場をのべている。このようなアプローチを，パイはケインズの国民所得分析の方法と対比して正当化しようとしているが，一般に社会心理学における社会的ないしは集団的性格の概念化と共通する手法であろう。要するに，問題はパーソナリティーを抽象度の高い次元のある断面で切ってみて，ある一般化を試みるということであろう。しかし，問題はパイ自身が認めるように，このような仮説の設定の当否を理論的に評価する基礎を，現在の社会科学はまだ十分にはもっていないことである。パイの研究もしたがって「記述的で主として推論的論文」を書くことになる。

だがこのような方法論上の限界にもかかわらず，仮説の設定の試みには，十分な意義があるとパイは主張する。それは現代中国の研究にとって，基本的な問題とは，情報不足ということよりも，むしろいかなる適切な知的脈絡を設定するかであるからである。いうまでもなく，パイの提出する一つの知的脈絡とは，政治発展という視角である。この視角からみると，現在の中国は伝統的秩序

から近代社会へと移行する過程にある。いわゆる過渡的社会体系（transitional social system）として位置づけられる。そして，ここからは，近代化の比較論や，共産主義と近代化との関係，政治文化の分析へと研究の分野が拡大していく。こうして，パイは，中国に固有な現象としての「権威の危機」の心理・文化的分析を通じて，中国の政治発展を説明する仮説に，大胆にも挑戦する道を開くのである。本書の構成は，主として，2章から9章までを仮説の構築と展開にあて，10章をあるケース（人民公社）への仮説の適用，11章を総括と展望にあてている。

III

さて，本書におけるパイの議論の鍵となる中国における「権威の危機」とは何か。それは中国人のパーソナリティー構造にとって，いかなる意味をもち，また，中国の政治発展にいかなる方向づけを与えるのであろうか。第1章は，その問題の輪郭を示している。まず，パイによれば，過渡的社会体系としての中国の著しい独自性は他の過渡的社会と違って，「一体感の危機」を経験しなかったかわりに，約1世紀にわたる「権威の危機」に脅かされ続けたことであるという。中華帝国の近代世界との接触による屈辱的地位への転落は，中国人の内部に苦悩と欲求不満，旧い無能な権威に対する疑惑と，新しいより強く完全で有能な権威を樹立しようという願望などの，一連の感情的脈絡を形成した。公的権威の挫折は，その後の中国の政治過程の中で，このような感情を尖鋭化し，中国人の不安感，不満，攻撃（aggression）的態度を高めた。そして攻撃的行動の露出は，中国人の不安感をさらに高めるばかりか，新しい形態の権威の再建を複雑化させるだけにすぎない感情をも解放したのである。「危機」への対応として，中国人の内部には一党支配への受容性が生まれたが，押しつけられた国家的権威は，けっきょく表面だけのものであった。というのは，中国人は権威と正当性の道徳的基礎について，深い心理的問題を抱えているからである。

しかし，「権威の危機」の心理的分析にはいる前に，パイは次に，中国人のパーソナリティー形成に深く係わる中国の政治・社会構造の特徴を一般化しようとする。すなわち，約2000年の歴史を有する中国の伝統的な政治的社会体系の基本的な構造的特徴は，(1)公式のイデオロギーへの極度の依存と，(2)ハイアラーキー的性質である。したがって，伝統的中国の政治文化のあらゆる次元は，イデオロギー的一致と官僚制的ハイアラーキーの結合形態が支配することになった。政治的秩序は一枚岩的であり，権威と秩序が強調された。このような環境のもとにおいては，中国人は政治を本質的に権威の問題としてとらえるようになり，政治が支配的官僚制と単一のイデオロギーを欠くときには，常に，不安，不満，脅迫感におそわれるようになった。こうして，中国の政治体系には，権威の危機に対する抵抗力の弱い政治文化を生み出すいくつかの特殊な原則が形成された。それは，(1)利益代表観念と要求の多様性の否定，エリートの道徳的態度，同情，寛容の原理の優位，(2)政治の価値，その万能性の重要性，(3)道徳的力，人格の陶冶，鋳型化の重要性，(4)道徳主義は調和を重視し，イデオロギーの機能は政治的現実との直接的対決を回避する――ことである。現実世界での紛争の抑圧と，人間の“攻撃”の統制のために，イデオロギーと権威への依存が必要となる。パイはここから，中心的な仮設の樹立へと進む。すなわち，儒教的伝統は構造的にもイデオロギー的にも，攻撃の正当性を否定することによって力を獲得する権威の形態を創造した。そのために，ひと度この権威の体系が崩壊するや，攻撃を統制する問題は，新しい権威の形態を樹立する過程を複雑化するのである。この仮説は，中国政治における極度の一枚岩的秩序から，劇的な緊張の高まりや紛争，敵意の噴出への転換を説明する。

中国の政治発展の特殊性を示す他の側面は，政治的補充の問題，すなわち，中国の支配グループの性格，政治と知識層との関係である。パイはエリートと世界文化との隔絶状態は，清朝末期から現在までの中国の例外的な特徴であるとし，政治権力の中核は，一つの反知性的政治的階級から，もう一つの別の反知性的政治的階級の手へと移ったのが，近代中国の政治の力学であると断言している。そして，政治から疎外された知識層の中に，中国の政治文化における「憎悪」の一つの根源をみる。

中国の政治発展の第3の特徴は，中国人の一体性の意識の根強さと，その憎悪への転化である。近代世界との接触によって，中国人はより自覚的な中国人となったがそれらの感情の根底にあるものは，いわゆる一体感としての「中華思想」である。中国人は中国人でなくなることができない以上，近代化における祖国の困難によって生まれる脅迫感や屈辱感から，個人的に逃れることはできない。本来，近代化の困難に対する中国人の態度が，中国人の精神とその内面的な一体感の中には悪しきものは何も存在しないということである以上，あらゆる困難な

問題は，“外国人”の仕業に帰せられる。しかし，中国の近代化への挫折は，中国人の文化的価値観にとって悲劇的な打撃をもたらしているはずだと，パイは指摘する。西欧の衝撃は，異なった価値体系を示したことではなく，むしろ価値の実際の分配形態，つまり中国人が自己の価値であると考えたもの――統治の技術と優越した物質文明の維持能力――を実現することでの失敗を，露呈させたからである。

以上のような歴史的社会的特徴の一般化から，いよいよパイは第5章において，中国の政治文化の中にあるSentiment（情緒）の問題へと推論を展開していく。すなわち，中国人の祖国の現状に対する欲求不満から，中国人の敵意の感情と憎悪の必要性が生まれてくる。中国の偉大さという精神の裏返しとして，近代中国の政治を支配する感情は，敵を探しだす熱意と結びついた憎悪の念に満たされる。そして中共は憎悪を積極的美徳であるとした。これらの政治文化の中にある核心的な情緒は，次のような信念を内包している。すなわち，(1)政治的自覚は怒りの情の激発を含む（情熱と大衆の激昂による政治的前進）(2)力と慰めは屈辱から引き出すことができる（休日としての国恥記念日の存在等）(3)政治において正義はない，(4)自己には常に咎めらるべきものはない，(5)平等はなく，あるものは上下関係のパターンのみである（機能的分化，専門的地位の不承認など）(6)敵と味方の間に鋭い区別を置く（政治的世界における友好関係の維持の困難）――などである。中共はこの脈絡でみると，強い感情表白癖(emotionalism)と革命行動の有効性とを極端なまでに結びつけたものといえる。今や情熱が正しい敵に向けられるならば，情熱的な行動は許容されるのである。ここにも，毛沢東における個人的徳性，情熱の社会的秩序，抽象的体系に対する相対的重視の根源があるとパイはみる。しかし，権威への失望から生まれた欲求不満の中で，中国人が自我の抑圧というパーソナリティーを失うとすれば，それは中国の将来にとって何を意味するのか。

第6章は権威の危機がもたらした心理的深層における問題を追求する。パイはここで，中国人の政治的社会化の過程，特に家族制度，権威のイメージと感覚，その起源と機能などについての仮説を提出する。パイはまず，中国文明における生活の基本的テーマとしての集団性(collectivity)を強調する。自我の集団性における地位の規定は，権威の適当な形態への関係によって支配される。したがって，個人的，集団的生活の中心的関心は，権威に関する礼儀作法である。権威は独占的で絶対的であった。権威の性質についての学習は，いうまでもなく大部分が家族制度の脈絡の中で行なわれた。パイはここで中国の家族制度の歴史的な特徴をあげる。それは，(1)孝行の最高価値，(2)攻撃のすべての形態の正当性の絶対的否認，(3)役割関係の厳格に定義された秩序の幻影である。(1)からは祖先崇拝→偉大さとの一体性の意識→権威との一体感が生まれる。権威なくしては自我は無意味となり，権威への外向的反応は，従属的態度となる。(2)からは情熱と行動がまれにしか調和に達しないという，中国人のパーソナリティーの発展の最も重要な力学的局面の一つが生まれる。(3)からは漠然とした性質の権威の受容は，一般的に適切な役割関係についての厳格な修養の過程と連結させられることが生まれる。こうした環境の中での社会化過程の力学をみると，けっきょく，中国人のパーソナリティーの中での明白な中心的要素は，感情のコントロールの必要性と深く係わっている。かくて社会関係の全体の体系は，一つの完全なデザインをつくりあげるように整合されなければならない。ここに中国社会を支配する同調性（conformity）の強力な機構の基盤が存在する。しかし，個人の修養はある権威の形態の存在に依存する。したがって，権威の欠落はパーソナリティーにとっての脅威となる。独占的権威，厳密な役割関係のないとき，広範な不安が発生する。混乱は危険であり，混沌は根本的な恐怖である。無秩序と混乱は，統制できない感情と攻撃を生み出すかもしれない。

近代化の圧力が伝統社会秩序を破壊し，新しい社会変動のもとの環境の中に中国人を投げ入れた場合，中国人の権威に対する関心には何が起こるのだろうか。挫けた父親と題する第7章は，かれの研究の鍵となる仮説を提出する。パイは中国の権威の危機の心理的な激しさは，中国人の最初の社会化過程が依然として，権威，秩序，感情の統制についての伝統的情緒によって支配されているという事実の中に，根源をもっているとみる。若い中国人にとっての深い心理的期待と中国の現実との矛盾は，緊張をつくりだした。そしてこの緊張はかれの政治行動の多くを支配する。その結果は，親と他の権威の形態に対する驚くほどに ambivalent（非一義的）な反抗の精神を生み出す。つまり，かれが権威を必要とする意識は，反面での権威の失敗に対する憤りと結びついているのである。かくて権威の問題をめぐって，攻撃が政治の領域で公然と動員されるための舞台はできあがるのである。権威の危機に対する中国人の反応の典型的なパターンは，

父親の権威のあらゆる代用物に対する打撃と，見せかけの追従と冷笑的な受容である。これらは中国の政治に対して，政治的論点に比べて，はるかに大げさな感情表白と敵意をもたらすことになる。かくて，激情と政治は無自覚的に結合される。これらの反応のパターンの力学は，中国人の新しい権威への探求の方向を決定し，さらに独占的で全能な権威の探求へと進ませる。権威の弱体化は恥の原因であり，父親の罪であり，個人のまたは息子の自由の拡大の機会とはならなかった。パイはさらに，儒教的な家族制度の権威主義的伝統に対するこのような反応のパターンは，中国の革命家たちに対する追従者の基本的な傾向を説明するのに重要な意味をもつと指摘する。けっきょく，孝行という義務を作りあげた文化は，政治と国家建設にとって，困難を課することになる。より広い次元での政治意識からみると，最近の数世代は，純粋な権威はすべてを変革しうる能力をもつという期待を抱いている。新しい政権に対しては，初期の熱意と子供じみた楽観主義をもって応える。だがその反面では，中国人は権威の魔力を熱望しながらも，自我についての深い認識から，権力者の側での悪意，攻撃(aggression)を予感し，権力によって不当に扱われるのではないかと疑念を抱くのである。

第8章と9章では，これまでの議論を基礎として，さらに，中国人の行動の力学，組織論へと推論が拡大され，中国の国家建設の困難性の心理・文化的次元を説明する仮説がより明確に示される。すでにパイの議論から過渡的社会としての中国の基本問題は，権威の危機が新しい強力な権威の樹立によって，解決される性質のものではなく，中国人の行動の能力や組織的行動を条件づけている心理的次元での問題を内包することが明らかであろう。特に，近代化の窮極的テストとしての組織的能力という点で，中国人は困難な問題をかかえているのである。パイは8章で，努力，意志の力，人間の精力などについての中国人の態度を歴史的文化的視角から分析したのち，毛沢東はこれらのエネルギーの力学的な緊張を中国人の中から引き出すことに成功したが，その中国的特性の故に，それらは中国の近代化の推進力としては，“不確実な基盤”でしかありえないという。そして，パイの仮説の結論的部分は，9章の組織論的分析の中でよりはっきりと示される。かれによると，中国人の組織的能力には深刻な非一義的な情緒と独特に混合した素質がみられるという。つまり，中国人の秩序への関心，権威への依存性は，階層的組織の秩序立った予測可能性を歓迎する反面，いかなる力学的な組織にも本質的な人間関係の厳しさは，攻撃についての中国人の基本的な不安感をよび起こすのである。中国人は感情的な熱狂と儀礼化された行動との間で，基本的な矛盾を感ずる。たとえば，毛沢東においては，感情的献身と定型化された組織的作業との間の葛藤は，基本的前提である。つまり，毛は組織が制度化されてくるや，それに対する強い不信を感ずる。したがって，中国の政治においては，組織的発展と集団的努力を動員する能力との間には，かなりの非一義性が存在する。あるときは熱心に官僚制的組織を建設しようとし，次の時点では，かれらがつくり上げた組織を引き剝がし，無視するようにみえる。ある意味では，中国の政治的組織は中国の奇術の精神の中にあるようである。これらの仮説は，中国の政治組織の不安定性・流動性と政治的機能の不確実性を説明する。

中国人の組織観は，さらにいくつかの要因や傾向に分けて説明される。たとえば，中国人の組織形成の能力は，中国人の演劇的，形式主義的行動への評価と関連するし，これは組織化状況のみせかけの能力とも関係がある。しかし，組織的思考と行動という中国人の著しい特性にもかかわらず，かれらにとっての問題は，公式の組織の内部において，信頼感を維持し，情緒の傷手を避けることなのである。また中国人にとっては，政治権力は窮極的には個人的仲間関係の連結に基づいているから，人間関係の分裂は権力の移転を意味する。したがって，体系の秩序立った安定性が，粛清や後継者争いなどで挫折すると，関係の平静なパターンは劇的に崩れ去るかもしれない。頼りなさの感覚は，日和見主義や個人的関係の系列への賭けを生み出す。このような脈絡からみると毛沢東時代の中共指導部の表面的に顕著な安定性は，毛の死後についての安定性の信頼すべき指標ではない。また，中国人の組織づくりの能力は，依存による安定性の追求と関連する中国人の同調性への激しい反応と，期待される行動基準への固執によって強められるが，反面では，そのような傾向は積極的な欲求から，行動操作(rerational) のうえでの必要性に転化する。つまり，修養，自覚的な意識は儀礼化された行動を生み出す圧力ともなる。けっきょく，パイは中国の組織過程を，急速で熱心な集団や組織の形成→その後に続く巨大でいくらか劇的な熱意と感情の噴出→そして，すぐに儀礼化が生まれる，という悪循環のパターンでとらえる。したがってパイによれば，中国人は本質的に組織人であるかにみえるが，これは明らかに不十分な描写であるという。中国

人は組織への参加という単なる行為にあまりにも多くを期待しすぎる結果，実際には，中国における大規模近代組織を包む精神は，全体的に内面的緊張，際限のない口論，うわさ話，相互の罪のなすり合いの精神となる。したがって，近代的組織は有効には機能しえなかったのである。

このような組織的行動から，パイは中国人の内部に，軍事的形態の組織を好む心理的理由をみる。中国においては，組織のモデルは一般に軍隊であったし，よく組織化された集団の文化的理想は，規律，秩序，熱意，忠誠，服従という本質的には軍事的な性質を強調しているのである。そして，このような近代中国の傾向を極端にまで押し進めたのが，中共である。だが，中共は軍事組織と軍事的手続きの利点を利用していく過程で，やはり古い基本的な問題にぶつかる。それはいかなる軍事組織にとっても基本的な問題としての感情表白と専門性，熱意と合理主義の問題である。中国の政治文化の脈絡からみてこれをいかに結合し，均衡させ，調和するかは，他の組織の課題との関連において，中国の近代化と発展にとっての鍵となるのである。つまり，より弾力的で反応的な組織の形態を，中国人はつくり出さねばならないのである。

以上がパイの仮説的推論の骨組であるが，この仮説に“具体性を与えるために”パイは第10章において自己の仮説を農村人民公社と大躍進の問題に適用してみせる。パイが人民公社化運動，しかも1958年から60年にかけてのそれを対象として選んだのは，それが中共の統治の歴史全体の小型化された説明を提供するという，かれの認識があるからである。パイは公社化運動は，毛沢東主義の本質的スタイルを代表し，中国の政治文化の鍵となる要素を代表するとみる。

パイの人民公社論は，当然ながらかれの中国人の行動・組織についての仮説の脈絡の中で展開される。まず結論的にいって，パイは公社化運動が，中国共産主義の近代化への回答という野心と，きわめて現実的な問題の認識のうえに始められたにもかかわらず，実際にはもとからの困難な問題を激化させるか，あるいは新しいより重大な問題を生み出すような方法で，中国文化の中にある潜在力を開放することになったと指摘する。大躍進と公社化の失敗は，毛沢東の権威に対する最初の挑戦であり，中国の権威の危機の復活をもたらした。ではそこにおける問題点とは何か。それは大別して三つに分けられよう。第1は，中共が大衆の能動性と創造性を鼓吹しようと要求したため，民衆の態度の操作が必要となり，しだいに階級闘争などの憎悪に訴える方法に重点が移行した。このようなパターンは，自発的熱意の純粋な精神で始まり，次に“敵”を見いだす黒い憎悪に満ちた精神へとすべり込む，中共の運動のサイクルの繰返しである。そして，テーマが自発性から階級闘争へと変わると，問題の焦点は，創造性と大衆の能動性から転じて，敵との抗争と統制と秩序の維持へと移るのである。第2は，新しい権威の樹立に伴う統制の機構と組織の樹立の成功は中国人によって，政策内容の実現そのものによる成功ととり違えられ，過信される傾向がある。中国人は単なる行政的経営的秩序，組織化に，魔術的な収穫を期待する。かくして，組織の形成そのものが重要となり，実質的な近代化への有効な措置が放置される。第3は，行政的計画についての中国人の弱点は，散漫で多角的機能 (multifunctional) の組織形態をつくり出したことである。中国人の計画性についての弱点は，一般に，秩序の報酬についての過信，専門化，特殊化された統制の系統よりも，全体的包括性のある組織形態への信頼感から生まれてくる。そして，部分的には毛沢東という計画に行政の力学的過程に関心のない，意志の力と指導力の結合という行動のスタイルを重視するロマンチックな革命家の“気まぐれ”に，政府の政策決定が対応しなければならないところからも生まれてくる。その結果，中共の計画は希望的思考様式に落ち込むし，行政は形式主義と範疇の厳格性の重視と，実質的問題の処理の軽視へと導かれる。こうして，人民公社における多角的機能の組織形態への信念は，より“伝統的”な中国の組織モデルよりもさらに非“近代的”なものとなる。残るものは，能動性，人間の意志の力で歴史を変えることができるという中共の不屈の信念である。それは現実への不感性，可能性の限界への盲目を生む反面，政治的に有能であるという中共の擬態を支えるものとなる。

最後の第11章で，パイは中国の今後の政治発展を展望するが，ここでかれは全体主義と近代化との関連について，“体制維持の投資”と“体制発展の投資”の区別という，おもしろい視角を与えている。すでにのべた議論の脈絡からいって，中国の政治文化には，統制の現象と発展の実質とを混同する素地があるが，現代の中国人は全体主義的神話の支配のもとにあって，体制の自立的発展の代わりに，“発展の外形”を達成するために，古い社会から継承された莫大な“資本”を浪費しているというのである。これらの資本とは，いうまでもなく，国内の

物的・人的資本，国際関係における友好関係等の政治・経済・社会的資本を指している。そして，中共が当面する難問は，既成の資本の浪費の後に，新しい資本を創造することの困難である。このような状況からみて，パイは中国の野心的な近代化の早急な実現の見込みはないとする。そして，未来の展望にとって重要な鍵となるのは，依然として，中共の指導権の推移であるが，パイは長期的な見とおしとして，現実主義派（反毛――実権派）の勝利を予言する。そして，中国はしだいに動員的体制から調整的体制へと移行し，体制は低いレベルでの均衡に到達するであろうとする。このような変化は，ついには中国人の性格，政治的社会化に影響を与え，最後には，中国により弾力的で寛容な政治文化を生み出すであろうと結んでいる。

IV

以上が本書の簡単な概要であるが，一種の推理小説の手法を思わせるような本書の議論には，中国研究者はある種のとまどいを感ずるのである。本書は最近のアメリカにおける中国政治の研究書としても，理論的一般化志向の極端な典型であろう。

さて，この長くなった書評を，若干の疑問を記することによって，さらに今すこし長くして終わることとしよう。まず最初に問題となるのは，パイの方法論そのものの論理的一貫性である。本書における設問の脈絡は，すでに明らかなように，かれのビルマについての研究（1962年）へと繋がっており，分析の枠組も同じように，パーソナリティー（定数），西欧の衝撃――権威の危機（媒介項），国家建設のテンポ（変数）という三つの要素の相関関係に関するものである。しかしながら，このパイの心理的概念化の枠組には，すでに，Robert T. Holt らが指摘しているように，根本的な弱点があるのである。つまりパイの定式では，定数―変数の因果関係の論理的な説明ができないことである。近代化とか政治発展という広範囲で多様な要因の作用する問題を，パーソナリティー構造に還元して説明することは，きわめて不確実で蓋然的な因果関係を提供するにすぎない。また逆に，この枠組は類似するパーソナリティー構造＝社会化過程をもついくつかの文化・社会が，異なった近代化の方向とテンポをもつことの理由を説明できない。このような仮説の基本的な論理的欠陥は，本書においてもかれの仮説の意味をあいまいにし，議論の鋭さと説得力をそいでいるようにみえる。

パイは序論において，本書の目的を「政治発展のある側面を説明するための仮説の設定である」とのべているが，「ある側面」が何であるのか必ずしも明らかではない。また，「中国人の態度・感情の星座を記述する」というが，かれの直観的推論の根底にある引照基準が何であるのかは，明確ではない。しかしながら本書を通読して気づくことは，けっきょく，パイが第10章で人民公社の分析を試みていることで，象徴的に示されているように，仮説構成の基礎にある引照基準は，大躍進政策と深く係わっているのである。さらに逆説的にいえば，本書における壮大な推論の体系と仮説は，大躍進政策の失敗を説明するために構築されたようにみえるのである。この意味ではパイの仮説は，還元主義というよりも，特徴的状況からの遡及主義である。したがって，ここでは清朝末期以来の政治発展全体と政治文化とのスコープが，一定の枠の中で矮小化され，中国人像も恣意的なプリズムを通して再現されることになったとみられる。

しかし，パイが大躍進運動を，仮説の出発点と同時にその終着点として選んだことは，本書におけるかれの議論の特徴とよく符合している。すなわち，本書では中国の政治文化と毛沢東とが無媒介に結合され，しばしば毛沢東の行動のスタイルを語ることによって，中国の政治文化が語られている。そして，国民党や蔣介石については，全くといってよいほど語られていない。不思議なことに，本書におけるパイの政治文化の概念はあいまいであり，政治文化と人民全体，政治文化と指導者，政治文化と個人，政治文化とイデオロギーなどの概念的な関係や区別が明確にされていない。このような傾向から当然に，毛沢東のスタイル＝人民公社化を，中国の政治文化の代表とする発想が生まれる。だがここでも，パイの還元論法の矛盾が露呈される。たしかに，大躍進運動は毛沢東思想のある重要な局面を極限的に表現したものである。しかし，中共政権の19年の歴史からみれば，それは政策上の一つの選択にすぎない。毛沢東の政治指導を含めて，中国の政治過程は各段階での課題の転換に対応して，振幅の大きい試行錯誤を繰り返している。したがって，各段階においては，異質な政治的スタイルが要求されることがしばしば起こるのである。異質な政治的スタイルを同一の中国人パーソナリティー構造に還元して説明することは，仮説の論理的一貫性をさらにあいまいなものとすることなしには，パイにとっては不可能であろう。

次に，パイの議論を貫く中国人のパーソナリティー構造と，近代化との関係についての宿命論的なペシミズム

は，批判されなければならないであろう。パイのペシミズムは次の4点に関係があるようにみえる。第1は，大躍進運動の失敗を仮説の出発点としていることである。第2は，パイが近代化をあまりにもアメリカ的な文化的拘束のもとで思惟していることである。パイは東洋的な社会化過程を近代化への障害として，強調しすぎていることである。第3は，パイには Benjamin Schwaltz が強調するような近代化過程の非一義的側面についての考察がほとんどなく，中国固有の独自的な近代化の形態を発見しようという努力を全く示さないことである。第4は，パイにおいては，日本・中国・ドイツ等の近代化の比較論的視点がほとんどなく，最後までパーソナリティー構造の拘束性に，かれの仮説が支配されていることである。

最後に，パイの方法に対するより根本的な疑問は，中国人の現実の具体的政治行動に対する心理的説明が，いったいその行動に対する他の非心理的説明とどのような関係に立つか，という問題である。パイの引用するいくつかの現象については，むしろ，心理的要因以外の他の要因のほうがより重大な役割を果たしており，それらは非心理的な別の枠組によってこそ，より十分に説明されるものがある。筆者にとっては，それらのケースに適用されるパイの心理的説明は，過度の単純化とこじつけとなるものが多いようにみえる。政治発展の分析における政治文化という概念の有効性は，必ずしも本書において十分には示されていないのである。

Raymond A. Bauer が Dinko Tomasic の研究(1953年)に対する批評の中で，「深層における心理分析は，第一次的な資料が利用できる時ですら困難な仕事で……直接的データが欠けている時には，そのような分析は人の精力を費すのに余り有効な方法ではない」とのべている。中国研究が当面している技術的に困難な問題を前提として，世界で最も古く独特の歴史的背景をもった文化の中で形成された，おそらくは最も理解し難い複雑な力学的構造をもつ中国人のパーソナリティー構造に，パイは大胆にも本格的な分析のメスを加えたわけであるが，その結果は，やはり多くの疑問点を残すものとなった。結論的にいって，本書の価値は，パイ自身がいうように，「中国研究の次元の拡大」への刺激を与えることで，新しい問題点，視角を論争的な方法で，われわれの前に提示したことであろう。パイの説明を単にナンセンスとして退けるのではなく，その根底にある方法意識の先駆的意義を学問的に評価して，長期的にそれを発展させる努力を続けることが，中国政治の研究の水準を高めることに繋がるのである。だがその方法は，知的脈絡の重視と同時に，中国文化と中国人についてのより透徹した洞察力によって裏づけられなければならないことは，いうまでもなかろう。

(当研究所職員現カリフォルニア大学
バークレー中国研究センター研究員　徳田教之)

アジア経済研究所刊行

中国農業技術体系の展開
山本秀夫著
222頁　¥ 720

▷伝統的農業技術体系の基本的性格—伝統的農業生産様式論の再検討／伝統的農耕方式における犁耕の展開／伝統的農耕方式の限界と出路▷農業生産諸力の分析—農地水利体系の展開／施肥体系の展開／品種改良の展開／農機具体系の展開▷農業生産方式の転換過程—農業労働力の質的転換／農業生産諸力の総合的展開／総括的展望

第2次5カ年計画期の中国経済
山本秀夫編
234頁　¥ 750

▷問題の所在(山本秀夫)▷人民公社と農業生産力の性質(山本秀夫)▷人民公社と社会主義商業(菅沼正久)▷「農業基礎，工業主導」の総方針について(藤村俊郎)▷中国の経済思想の変遷(小島麗逸)▷企業管理における大衆運動(尾上悦三)▷経済発展と政治・思想工作(小林弘二)

アジア経済出版会発売